

デンマークの「宗教教育」の学習成果記述について の一考察 - 日本の「特別の教科 道徳」との比較に おいて -

著者	堀井 祐介
著者別表示	HORII Yusuke
雑誌名	金沢大学国際機構紀要
巻	4
ページ	49-60
発行年	2022-03
URL	http://doi.org/10.24517/00066048



論文

デンマークの「宗教教育」の学習成果記述についての一考察 －日本の「特別の教科 道徳」との比較において－

堀井 祐介^{注1}

要 旨

本稿は、デンマークの「宗教教育(kristendomskundskab)」と日本の「特別の教科 道徳」(以下、「道徳科」)を比較し、人間として生きていく基盤となる道徳性、倫理観に関する共通点を見いだすことを目的とする。具体的には、「宗教教育」における学習成果記述、授業指導要領等を確認しそれらの記述の特徴を明らかにし「道徳科」と比較した。その結果、「道徳科」が内容項目として概念用語をあげて、具体的に「行うこと」という表現で規範的に示しているのに対して、「宗教教育」の方では欧州で主流となっているアウトカム評価を受けた形で「知識を有している」と「～できる」という表現がセットで使われていた。このように大きな差がある一方で、学習成果がカバーしている範囲、内容を総合的に見てみると共通点があることも確認出来た。

I. はじめに

本稿は、デンマークの「宗教教育(kristendomskundskab)」と日本の「特別の教科 道徳」(以下、「道徳科」)を比較し、人間として生きていく基盤となる道徳性、倫理観育成に関する共通点を見いだすことを目的とする。具体的には、1. 「宗教教育」における学習成果記述、「道徳科」の授業指導要領等を確認、2. それぞれの特徴を明らかにし、3. 「宗教教育」と「道徳科」の類似点、相違点を抽出し、4. 両者に共通する内容について考察を加える。キリスト教の福音ルーテル派を国教とするデンマークと、憲法で国による宗教への関与を厳しく制限されている日本とでは、文化背景が大きく異なるが、初等・中等教育において児童・生徒が身につけるべき道徳性、倫理観には共通する点が多いこともまた事実である。背景の違いに配慮しつつ、デンマークと日本で道徳性、倫理観に関する教育について比較することは、日本の「道徳科」の国際的位置づけを明らかにすることに十分資する研究であると考えられる。

II. デンマークについて

デンマークは北欧に位置する王国で、正式国名はデンマーク王国であり、国土面積は、九州7県の面積を足したものとほぼ同じの約4.3万平方キロメートル、人口は約580万人、首都はコペンハーゲンである。英語やドイツ語と同じグループであるデンマーク語が使用され、宗教は福音ルーテル派(デンマーク国民教会)である。立憲君主制を採用する王国であり、現在の国家元首は、マルグレーテ2世女王である。議会は、定数179名の一院制で、EUおよびNATO加盟国である。高福祉国家、デジタル化推進国家としても知られている。

III. デンマークの教育システム(初等, 中等教育)

デンマークでは、保育所、入学前教育から高校修了までの普通教育課程、成人向け教育(職業訓練, 学び直しなど)は子ども教育省(Børne- og Undervisningsministeriet)^{注2}所管であり、高校修了以降は、教育研究省(Uddannelses- og Forskningsministeriet)^{注3}所管となっている。

デンマークでは、教育を受ける義務は法で定められているが、この義務は国民学校(folkeskolen)へ行く義務ではないため^{注4}、国民学校以外での教育実施も選択肢としては存在する^{注5}。デンマークにおける義務教育は、入学前準備クラス(børnehaveklassen)および第1学年から第9学年の原則10年で、6歳になった8月に入学前準備クラスに入ることにより開始される^{注6}。またいわゆる高校課程へ進学するには学習が不十分と考えている生徒が本人の希望により第10学年で学ぶことを選択することも出来る^{注7}。

国民学校での科目は大きくは、必修科目(obligatoriske fag)と選択科目(valgfag)に分けられており、「宗教教育」は必修科目に分類されている。参考までに、人文科学分野での必修科目としては、「デンマーク語」(全ての学年)、「英語」(1年生から9年生)、「宗教教育」(堅信礼準備クラスを除く全ての学年)、「歴史」(3年生から9年生)、「ドイツ語またはフランス語」(5年生から9年生(一部例外あり))、「公民」(8年生と9年生)となっている。

IV. デンマークにおける「宗教教育」の位置づけ

「宗教教育」の法的根拠について説明する。デンマークでは、「国民学校に関する法(Lov om folkeskolen)^{注8}」において、教育過程での履修科目および配当年次が決められ

ており、人文科学分野の科目として「宗教教育」が置かれている。同法第5条第2項c)において「宗教教育」は、堅信礼準備クラス(7年生または8年生)を除く全ての学年で実施されることとなっている。この「宗教教育」におけるキリスト教とは福音ルター派であること、および、親権者が書面で申告した場合、親権者自身が宗教に関する教育を行うことで「宗教教育」が免除されることも同法第6条に記されている。「宗教教育」の推奨される年間授業時間数は、1年生および6年生は60時間、その他の学年は30時間となっている。

V. デンマークの「宗教教育」の目的

国民学校の科目および主題に関する目的、能力目標、技能目標、知識目標を定める法令(Bekendtgørelse om formål, kompetencemål og færdigheds- og vidensmål for folkeskolens fag og emner (Fælles Mål))^{注9}によると、「宗教教育」の目的は以下の様に記されている(下線筆者)。

第2章 科目および主題の目的

第4条 「宗教教育」

生徒は、「宗教教育」の科目において、一個人として、また、他者との関わりにおける人生観における宗教的特質(側面)の意味を理解し行動することができるようにするための技能と知識を獲得する。

第2項

生徒は、キリスト教の歴史と現代社会への関わり、および、聖書の物語とそれらが私たちの文化における基本的な価値観に対して持っている意味についての知識を獲得する。加えて、最高学年においては、生徒は、他の宗教および人生観についての知識も獲得する。

第3項

生徒は、民主主義社会における、個人の考え方、連帯責任、行動に関わる専門的能力を活用できるようになる。

「宗教教育」の目的であるため当然宗教色が前面に押し出されているが、下線に示されているように現代社会においてある意味普遍的に求められる項目が含まれており、学習指導要領に記されている道徳教育の目標「第1章総則の第1の2の(2)に示す道徳教育の目標に基づき、よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度

を育てる。」^{注10}と比較可能な内容が含まれていると考えられる。

VI. デンマークの「宗教教育」の「科目ガイド」

デンマークの国民学校における初等・中等教育では、科目ごとに「科目ガイド (faghæfte)」^{注11}が用意されている。単純比較は出来ないが、日本における「学習指導要領」と「学習指導要領解説」を合わせたようなものと考えられる。この「科目ガイド」は、「導入」、「国民学校の目的」、「科目の目的(科目全体としての目的、科目で身につけさせる能力)」、「学習計画」、「授業指導要領」から構成されている。「科目の目的」には、科目全体の目的および4つの能力分野毎に能力目標、技能目標、知識領域・目標が記されている。「学習計画」では、学校の目的、教育組織に関する法律、当該科目の目的などの関係性を説明しながら科目の根幹について記されている。「授業指導要領」は、国民学校法、当該科目の目的などを説明しながら、授業で扱う主題、授業計画、授業実施、学習評価などについて記されている。本稿では、科目で身につけさせる能力を「宗教教育」における学習成果と見なして論を進めていく。

VII. デンマークの「宗教教育」学習成果

「宗教教育」では、次の表1にあるように能力項目および能力項目毎に設定されている能力目標 (kompetencemål)、技能目標、知識領域・目標 (færdigheds- og vidensområder og-mål) が成長段階毎(3年生以降、6年生以降、9年生以降)に分けて示されている^{注12}。本稿では、これらの能力目標、技能目標、知識領域・目標を学習成果として扱う。

これらの能力目標、技能目標、知識領域・目標における記述の特徴としては、能力目標では主題を示した後、それらに対して「考えを表現する」、「判断する」、「受け入れる」、「説明する」という動詞が置かれ、それらに対して「できる」という語尾で終わっている。技能目標、知識領域・目標においても、同様に、「考える」、「議論する」、「表現する」、「説明する」、「解釈する」という動詞と「できる」が組み合わせられ、それと「知識を有している」部分がセットとなっている点である。

また、これら学習成果と組み合わせる形で、次にあげるように、「科目ガイド」の「授業指導要領」の「3. 授業計画、授業実施および授業における評価」では、「3.1 教材選択および活動」および「3.3 授業に対する多様なアプローチ」でより具体的な授業内活動での学習成果確認方法が示されている^{注13}。

表1 「宗教教育」能力項目, 能力目標

能力項目	3年生以降	6年生以降	9年生以降	技能目標, 知識領域・目標
	能力目標			
人生観 および 倫理観 (道徳規範)	生徒は、人生に対する基礎的な疑問および倫理原則に基づく宗教的特質(側面)について自らの考えを表現することができる。	生徒は、人生に対する基礎的な疑問および倫理原則に基づく宗教的特質(側面)の内容および意味について自らの考えを様々な形で表現することができる。	生徒は、人生に対する基礎的な疑問および倫理原則に基づく宗教的特質(側面)の内容および意味について自ら判断を下すことができる。	人生観
				倫理観(道徳規範)
				信仰の選択および人生の解釈
				言語および文語
聖書の 物語	生徒は、聖書の重要な物語について自らの考えを表現することができる。	生徒は、文化的表現における聖書の重要な物語の主題を受け入れることができる。	生徒は、聖書の重要な物語の基本的な価値観を説明することができる。	聖書
				物語および人生の解釈
				物語および文化
キリスト 教	生徒は、キリスト教とは何か、キリスト教の歴史における重要な出来事、デンマークにおける国民教会の意味、について自らの考えを表現することができる。	生徒は、キリスト教とは何か、について説明し、キリスト教の歴史上の特徴(デンマークにおける国民教会の意味も含まれる)を説明することができる。	生徒は、キリスト教とは何か、について説明し、キリスト教の歴史上の特徴(デンマークにおける国民教会の意味も含まれる)について自ら判断を下すことができる。	キリスト教の歴史
				キリスト教の基本概念
				キリスト教的表現
キリスト教 以外の宗教 およびその 他の人生哲 学			生徒は、世界の大宗教およびその他の人生哲学の起源、歴史、現代の様態における主題と課題について自ら判断を下すことができる。	特徴
				基本的な概念
				様態

「3.1 教材選択および活動」においては、それぞれの能力項目に対して質問が設定されている。

●人生観および倫理観(道徳規範)

- 人間であると言うことは？
- よい生き方とは？

●聖書の物語

- 聖書の物語が投げかけている人類共通の疑問とは？
- 聖書の物語は過去および現在の文化や社会にどのように影響を与えてきたか？

●キリスト教

- キリスト教、中でも福音ルーテル派の主要概念と基本的な様態は？
- キリスト教の過去および現在の個人および社会に対する意味とは？

●キリスト教以外の宗教およびその他の人生哲学

- 対象としたキリスト教以外の宗教およびその他の人生哲学における主要概念と基本的な様態とは？
- キリスト教以外の宗教およびその他の人生哲学の今日の個人および社会に対する意味とは？

さらに、「科目ガイド」「3.3 授業に対する多様なアプローチ」では、以下の様にアプローチ毎に焦点および実践例が示されており、これらにより、国際社会における人生観、倫理観(道徳規範)を幅広くカバーしていると考えられる。

●歴史的批判的アプローチ

- 焦点：さまざまな資料に対する分析および批判的問いかけ
- 実践例：宗教的文献

◇児童・生徒が聖書、コーラン、その他宗教的文献を自分たちの時代と比べて文化的にも歴史的にも異なることを意識して読む

●現象論的アプローチ

- 焦点：基本的な人生に対する疑問についての共同での哲学的対話
- 実践例：現象としての「悪」

◇児童・生徒が「悪」という現象について自らの生き方、周囲の環境などを考慮し、より深く考える

●物語的アプローチ

- 焦点：物語、神話、お話し
- 実践例：アブラハムとイサクのお話し

◇神のお告げで授かった最愛の息子イサクを神への信仰(神からの試練)により殺害しようとした父アブラハムの物語について、児童・生徒と一緒に考える

●宗教現象比較アプローチ

➤ 焦点：宗教要素の比較、物語、神話、儀式などのつながりの調査

➤ 実践例：純潔と不浄

◇児童・生徒に、秩序と無秩序と絡めて純潔と不浄の概念を学ばせる

●解釈学的アプローチ

➤ 焦点：事前理解、理解、解釈の循環

➤ 実践例：神話およびその機能を含んで世界を言語で理解する

◇児童・生徒に、宗教的または文学的作品を読ませ、言語には、記録・記述する機能と翻訳・解釈する機能の二つがあることを理解させる

●宗教社会学および文化人類学的アプローチ

➤ 焦点：地域、文化、社会における宗教研究

➤ 実践例：私たちの町における宗教

◇児童・生徒に、地域社会におけるキリスト教信仰およびその実践例を見つけさせ、宗派による違いを認識させる

VIII. 「宗教教育」と「道徳科」四つの視点、22の内容項目との記述の比較

「道徳科」では学習成果ではなく学ぶ内容として「四つの視点」とそれぞれに対応した「内容項目」が設定されている。内容項目の数は小学校第1学年および第2学年では19、小学校第3学年および第4学年では20、小学校第5学年、第6学年および中学校では22となっている^{注14}。道徳性、倫理観は個人の思想信条に関わるものであるため、「道徳科」で学ぶ内容について学習成果という用語を用いるのは不適切であることは承知しているが、児童・生徒に身につけることを求めている内容を記述していると言う点でこの「四つの視点」および「内容項目」を「道徳科」における学習成果の記述と見なす。次に参考として「道徳科」の中学校の項目(表2)を示す。

紙幅の関係上、「宗教教育」の能力目標、技能目標、知識領域・目標と「道徳科」の四つの視点、22の内容項目全てについてカバーしている範囲を比較することは出来ないが、ここでは、「宗教教育」の9年生以降(表2)と「道徳科」の中学校の項目(表3)を取り上げて比較してみる。

表2 「宗教教育」能力目標, 技能目標, 知識領域・目標

9年生以降		
人生観および倫理観(道徳規範)	能力目標	生徒は、人生に対する基礎的な疑問および倫理原則に基づく宗教的特質(側面)の内容および意味について自ら判断を下すことができる。
	人生観	生徒は、人生に対する基礎的な疑問に対する宗教的特質(側面)の意味についてじっくりと考えることができる。
		生徒は、人生に対する基礎的な疑問に関する信仰の選択についての知識を有している。
	倫理観(道徳規範)	生徒は、人間同士の関係における倫理原則と道徳実践についてじっくりと考えることができる。
		生徒は、人間同士の関係における倫理原則と道徳実践についての知識を有している。
	信仰の選択および人生の解釈	生徒は、様々な信仰の選択および人生におけるそれらの解釈について議論することができる。
生徒は、様々な信仰の選択および人生におけるそれらの解釈についての知識を有している。		
言語および文語	生徒は、目的を持って学術文献を読み、その内容、目的、構造について、口頭および文章により微妙なところまで自らの考えを言語で表現することができる。	
	生徒は、難解な学術用語、概念、学術文献の目的および構造についての知識を有している。	
聖書の物語	能力目標	生徒は、聖書の重要な物語の基本的な価値観を説明することができる。
	聖書	現代のおよび歴史的視点における旧約聖書および新約聖書からの重要な物語を解釈することができる。
		生徒は、旧約聖書および新約聖書の物語についての知識を有している。
	物語および人生の解釈	生徒は、人生に対する基礎的な疑問に関する聖書の物語の解釈についてじっくりと考えることができる。
生徒は、聖書の物語における人生に対する基礎的な疑問についての知識を有している。		
物語および文化	生徒は、言語、芸術、社会における聖書の物語の意味について解釈することができる。	
	生徒は、現代のおよび歴史的視点をもって聖書の物語の文化への痕跡についての知識を有している。	
キリスト教	能力目標	生徒は、キリスト教とは何か、について説明し、キリスト教の歴史上の特徴(デンマークにおける国民教会の意味も含まれる)について自ら判断を下すことができる。
	キリスト教の歴史	生徒は、デンマークにおけるキリスト教の発展および国民教会の意味についてじっくりと考えることができる。
		生徒は、キリスト教の歴史および国民教会の主な特徴についての知識を有している。
	キリスト教の基本概念	生徒は、人生解釈としてのキリスト教の基本概念についてじっくり考えることができる。
生徒は、キリスト教の重要な基本概念およびその背後にある価値観についての知識を有している。		
キリスト教的表現	生徒は、キリスト教の象徴、儀式、音楽、賛美歌の意味についてじっくりと考えることができる。	
	生徒は、重要な象徴、儀式、音楽、賛美歌の解釈について知識を有している。	
キリスト教以外の宗教およびその他の人生哲学	能力目標	生徒は、世界の大宗教およびその他の人生哲学の起源、歴史、現代の様態における主題と課題について自ら判断を下すことができる。
	特徴	生徒は、デンマークにとって意味を持つ世界の宗教および(人生)哲学の主な特徴についてじっくり考えることができる。
		生徒は、世界の宗教および(人生)哲学の主な特徴についての知識を有している。
	基本的概念	生徒は、世界の宗教および(人生)哲学における重要な基本概念と価値観の意味を説明することができる。
		生徒は、世界の宗教および(人生)哲学における重要な基本概念と価値観についての知識を有している。
様態	生徒は、人間の人生における重要な象徴、儀式の意味についてじっくりと考えることができる。	
	生徒は、世界の宗教および(人生)哲学において重要な象徴および儀式がどのように使われているかについての知識を有している。	

表3 「道徳科」

中学校		
A 主として自分自身に関すること	自主, 自律, 自由と責任	(1) 自律の精神を重んじ, 自主的に考え, 判断し, 誠実に実行してその結果に責任をもつこと。
	節度, 節制	(2) 望ましい生活習慣を身に付け, 心身の健康の増進を図り, 節度を守り節制に心掛け, 安全で調和のある生活をする。
	向上心, 個性の伸長	(3) 自己を見つめ, 自己の向上を図るとともに, 個性を伸ばして充実した生き方を追求すること。
	希望と勇気, 克己と強い意志	(4) より高い目標を設定し, その達成を目指し, 希望と勇気を持ち, 困難や失敗を乗り越えて着実にやり遂げること。
	真理の探究, 創造	(5) 真実を大切にし, 真理を探究して新しいものを生み出そうと努めること。
B 主として人との関わりに関すること	思いやり, 感謝	(6) 思いやりの心をもって人と接するとともに, 家族などの支えや多くの人々の善意により日々の生活や現在の自分があることに感謝し, 進んでそれに応え, 人間愛の精神を深めること。
	礼儀	(7) 礼儀の意義を理解し, 時と場に応じた適切な言動をとること。
	友情, 信頼	(8) 友情の尊さを理解して心から信頼できる友達をもち, 互いに励まし合い, 高め合うとともに, 異性についての理解を深め, 悩みや葛藤も経験しながら人間関係を深めていくこと。
C 主として集団や社会との関わりに関すること	相互理解, 寛容	(9) 自分の考えや意見を相手に伝えるとともに, それぞれの個性や立場を尊重し, いろいろなものの見方や考え方があることを理解し, 寛容の心をもって謙虚に他に学び, 自らを高めていくこと。
	遵法精神, 公德心	(10) 法やまじりの意義を理解し, それらを進んで守るとともに, そのよりよい在り方について考え, 自他の権利を大切にし, 義務を果たして, 規律ある安定した社会の実現に努めること。
	公正, 公平, 社会正義	(11) 正義と公正さを重んじ, 誰に対しても公平に接し, 差別や偏見のない社会の実現に努めること。
	社会参画, 公共の精神	(12) 社会参画の意識と社会連帯の自覚を高め, 公共の精神をもってよりよい社会の実現に努めること。
	勤労	(13) 勤労の尊さや意義を理解し, 将来の生き方について考えを深め, 勤労を通じて社会に貢献すること。
	家族愛, 家庭生活の充実	(14) 父母, 祖父母を敬愛し, 家族の一員としての自覚をもって充実した家庭生活を築くこと。
	よりよい学校生活, 集団生活の充実	(15) 教師や学校の人々を敬愛し, 学級や学校の一員としての自覚をもち, 協力し合ってよりよい校風をつくるとともに, 様々な集団の意義や集団の中での自分の役割と責任を自覚して集団生活の充実に努めること。
	郷土の伝統と文化の尊重, 郷土を愛する態度	(16) 郷土の伝統と文化を大切にし, 社会に尽くした先人や高齢者に尊敬の念を深め, 地域社会の一員としての自覚をもって郷土を愛し, 進んで郷土の発展に努めること。
D 主として生命や自然, 崇高なものとの関わりに関すること	我が国の伝統と文化の尊重, 国を愛する態度	(17) 優れた伝統の継承と新しい文化の創造に貢献するとともに, 日本人としての自覚をもって国を愛し, 国家及び社会の形成者として, その発展に努めること。
	国際理解, 国際貢献	(18) 世界の中の日本人としての自覚をもち, 他国を尊重し, 国際的視野に立って, 世界の平和と人類の発展に寄与すること。
	生命の尊さ	(19) 生命の尊さについて, その連続性や有限性なども含めて理解し, かけがえのない生命を尊重すること。
	自然愛護	(20) 自然の崇高さを知り, 自然環境を大切にすることの意義を理解し, 進んで自然の愛護に努めること。
	感動, 畏敬の念	(21) 美しいものや気高いものに感動する心を持ち, 人間の力を超えたものに対する畏敬の念を深めること。
	よりよく生きる喜び	(22) 人間には自らの弱さや醜さを克服する強さや気高く生きようとする心があることを理解し, 人間として生きることの喜びを見いだすこと。

これら学習成果としての能力目標、技能目標、知識領域・目標、「3.1 教材選択および活動」、「3.3 授業に対する多様なアプローチ」での記述を踏まえて、大きな括りとして両者の内容の対応関係を見てみると、「宗教教育」の「人生観および倫理観(道徳規範)」における「人生観」は「四つの視点」の「A 主として自分自身に関すること」(以下「A」)の内容をカバーしており、同じく「倫理観(道徳規範)」は「B 主として人との関わりに関すること」(以下「B」)の内容をカバーしていると考えられる。「宗教教育」の「聖書の物語」「物語および人生の解釈」、「物語および文化」は「B」および「C 主として集団や社会に関すること」(以下「C」)とつながっている。「キリスト教」「キリスト教の歴史」は「C」(16)、(17)と、「キリスト教の基本概念」は「D 主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関すること」(以下「D」)(19)、(21)、(22)と、「キリスト教的表現」は「D」(21)の内容を含んでいる。「キリスト教以外の宗教およびその他の人生哲学」「特徴」は「C」(18)と、「基本的概念」は「D」(19)、(21)、(22)と、「様態」は「D」(21)の内容を含んでいると見ることが出来る。

「宗教教育」と「道徳科」の学習成果記述における違いとしては、人間として生きていく基盤となる道徳性に関して、「道徳科」が内容項目として概念用語をあげて、具体的に「行うこと、すること」という表現で規範的に示しているのに対して、「宗教教育」の方では「～できる」という表現が使われている点と「知識を有している」というそれらに関する知識の有無がセットになっている点が異なっている。この「できる」という表現は、外国語運用能力に関して設定されている欧州言語共通参照枠(Common European Framework of Reference for Languages: CEFR^{注15})に代表される欧州で主流となっているアウトカム評価の視点から取り入れられており、児童・生徒自身の活動(「考える」、「判断する」、「受け入れる」、「議論する」、「表現する」、「説明する」、「解釈する」)ことが「できる」という記述に収斂されている点が特徴的であると考えられる。「道徳科」の評価においては、「数値による評価を行わないものとする」とされていること、「内容項目」の記述が規範的であることなどから「できる」という表現がそぐわないことは当然のことである。

もちろん、キリスト教およびその他宗教的観点は大きな位置を占めているが、初等・中等教育において児童・生徒に求める道徳性、倫理観については、これらの学習成果、「3.1 教材選択および活動」「3.3 授業に対する多様なアプローチ」と「道徳科」とで共通・普遍的な部分があることがわかる。

IX. おわりに

ここまで、デンマークの「宗教教育」と日本の「道徳科」の学習成果記述について見てきた。先にも述べたように、キリスト教の福音ルーテル派を国教とするデンマークと、

憲法で国による宗教への関与を厳しく制限されている日本とでは、文化背景が大きく異なり、そのことは、デンマークでの学習成果にはキリスト教やその他宗教的観点が前面に押し出されていることから明らかである。一方で、児童・生徒が身につけるべき人類に普遍的な道徳性、倫理観においては共通項があることも事実であり、そのことは両者の学習成果比較からも見て取れる。また、「宗教教育」の「科目ガイド」の「授業指導要領」においては、生徒の全方的発達を促す、教師と児童・生徒および児童・生徒同士におけるコミュニケーション対話的、探究的アプローチが重視されており、この点も「道徳科」と共有していると考えられる。今後は、「道徳科」での「学習指導要領」および「学習指導要領解説」における指導内容と「宗教教育」の「科目ガイド」での「できる」という表現に対する指導についての考察を追加し、「道徳科」の国際的位置づけに関する調査研究をさらに深めていきたい。

【注】

1. 金沢大学 教学マネジメントセンター
以下のURLへのアクセス日は全て2022年1月25日
2. デンマーク子ども教育省サイト (<https://www.uvm.dk/>)
3. デンマーク教育研究省サイト (<https://ufm.dk/>)
4. デンマーク基本法 (Danmarks Riges Grundlov (Grundloven) <https://www.retsinformation.dk/eli/ta/1953/169>)
第76条「就学義務年齢に達した全ての子どもは国民学校において無償で教育を受ける権利を有する。国民学校で一般的に求められるものと同じレベルの教育を子どもたちが受けられるように自ら手配する両親または保護者は、子どもを国民学校に送る義務は無い。」
5. デンマーク子ども教育省サイト (<https://www.uvm.dk/statistik/grundskolen/elever/elevtal-i-grundskolen/friskoler>または[privatskoler](https://www.uvm.dk/statistik/grundskolen/privatskoler)と呼ばれる私立学校(公的補助あり)または第8, 9, 10学年を対象とする寄宿制のefterskolerなどがある。2019/2020年では、friskolerまたはprivatskoler在籍児童・生徒の割合は約18.1%, efterskoler在籍生徒の割合は約1.4%となっている。
6. デンマーク子ども教育省サイト (<https://www.uvm.dk/folkeskolen/fag-timetal-og-overgange/skolestart-og-boernehaveklassen/skolestart>)
7. デンマーク子ども教育省サイト (<https://www.uvm.dk/folkeskolen/fag-timetal-og-overgange/10-klasse/om-10-klasse>)
8. デンマークオンライン法令システム (<https://www.retsinformation.dk/eli/ta/2020/1396>)
9. デンマークオンライン法令システム (<https://www.retsinformation.dk/eli/ta/2020/1217>)
10. 「中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 特別の教科 道徳編(平成29年7月)」p.154
11. デンマーク子ども教育省教育ポータル (<https://emu.dk/grundskole/kristendomskundskab/faghaefte-faellesmaal-laeseplan-og-vejledning?b=t5-t10>) よりダウンロード
12. 「科目ガイド」pp.8-15
13. 「科目ガイド」pp.51-63
14. 「中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 特別の教科 道徳編(平成29年7月)」pp.24-25
15. 欧州委員会CEFR関連サイト (<https://www.coe.int/en/web/common-european-framework-reference-languages>)

Analysis on the Learning Outcomes of the Danish school subject "the Religious Knowledge" in comparison with the Japanese school subject "the Moral Education".

HORII Yusuke

Abstract

The aim of this paper is to find out that “the Religious Knowledge” education (hereinafter called RK) in Denmark and “the Moral Education” (hereinafter called MR) in Japan have some common points in their learning outcomes on morality and ethics that are basis of living. First, the characteristics of learning outcomes description of RK in the subject guidance in Denmark are revealed and compared to those of MR in teaching guidelines in Japan. In RK, the expressions with the verb “can” and “have knowledge” are used. In MR, the normative description like “what to do” is used. While there is such a difference and RK education has a lot of religious descriptions that MR does not have, there are some common points in their learning outcomes on morality and ethics in general.